

文化



2月

上村 豊

琉球大学美術教育専修は、入学定員わずか5人の小さな専攻科であるが、既存のジャンルやアカデミックな芸術教育にこだわらない柔軟な校風が、学生たちの自由な主体的かつユニークな表現活動への関わりを育んできた。在学中、学生たちは、自分にとって本

当に意味のあるテーマを見つけ、それを表現するための方法を「から学び直す」とが求められる。本年度の「卒業展」②/10~14、浦平美術館にて、専修教員のスプリー・ティトウス氏は、出聖者の4年間を振り返って「作品制作し始める時私たちは白紙で、どうなるのか全く分かりませぬ。次

筆圧で刻む描線集積 緻密で根気強い作品

知念 叶子 與座 花織

々想像していく中でその人間を、4点の絵画作品を表現ししかれない形になっていきます」と述べている。この言葉通り、会場にはそれぞれに個性の探求の軌跡を映し出す、バラエティーに富んだ作品が並んだ。ここではその中から、知念叶子と與座花織の作品を取り上げてみたい。

知念は、半年間通い続けた首里・金城町の一角の空を、昨日は在ったが今日はなすテクニクな風景の中に、時間経過や多重露光の手法に似ているかもしれない

子どもたち、それら事物や出来事のあいまいな痕跡のようなものが儼然と信問見えてくる。視点も複数あるように、それも単なる並列移動ではなく、連続して見える風景の中に、別の角度から描かれた同じ建物が、度々現れたように写真でいつ長

が、フィルムにオートマティックに記録された光像と違い、日々の現地制作によって変色・変形した紙の上に作者自身の筆圧で刻み込まれた描線の集積は、物質的な抵抗感と描き手の身体的な抵抗感と描き手の身体性に伴った、絵画でしか表現できない空間を生み出している。

興味が、工芸という営みの本質に迫る探求に思える。植物をいったんその繊維のレベルにまで解析し、そこから「本質的な姿」(作者)を再構成していく、そのようなメタモルフォーゼの過程に身をもって立ち会う中

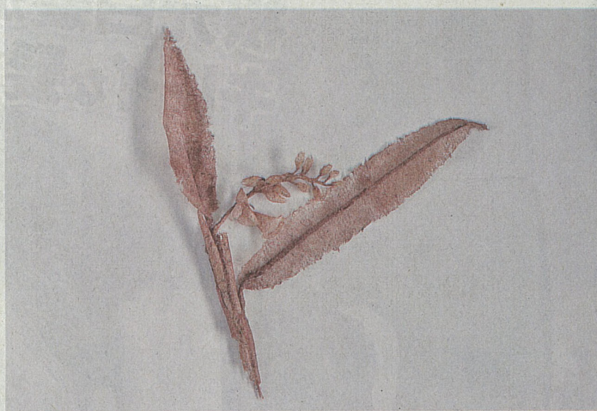
木繊維を紙に漉き、さらにその紙を用いて元の植物の姿を再現する試みを1年以上続けてきた。緻密で根気強い取り組みの成果を、イテールによく表れている。目を惹きつけられた。身近な自然への尽きせぬ興味、徹底した手仕事へのこだわりと喜び。素朴ではあるが、工芸という営みの本質に迫る探求に思える。

植物をいったんその繊維のレベルにまで解析し、そこから「本質的な姿」(作者)を再構成していく、そのようなメタモルフォーゼの過程に身をもって立ち会う中

興味、徹底した手仕事へのこだわりと喜び。素朴ではあるが、工芸という営みの本質に迫る探求に思える。



知念叶子「量」(部分)

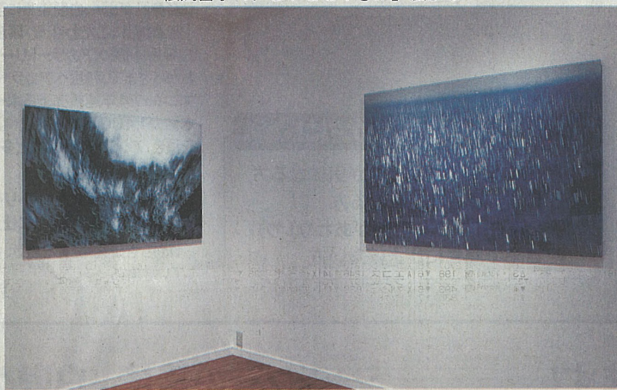


與座花織「iber plant-月桃」



石垣克子展「Longing the spring」より

根間智子『Paradigm』展より



冷静に見極める構成 無垢な印象への希求

石垣克子展

根間智子展

ファイエットで開かれた石垣克子展(2/12~21)には、作家の主要キーワードの「黄色」を題材にした約20点

の新作が並んだ。今回石垣は、繰り返して描いてきたモチーフを、小品から大作まで異なるサイズ、油彩、ペンのさまざまな表現形式で表現し、本人もこのパリエーション(変奏)を意識して楽しんでいっているように見える。特に油彩画においては、昨年「Mabon Project」を満ち、平和祈念堂ほかに出展したペン画連作で、異質ともいえる集中度や緊張感にまで高められた独自の境地を、油絵画という即物的なメディアを用いてどのようにキヤムパストという現象に定着させるか、多様な試みを展開している。重厚なストロークから、軽快な線描、フラットな塗りから、にじみ浸食し合う色面まで、石垣の身体に蓄えられた画家のネイチヤーが、縦横無尽に喚び起こされているかのようだ。これと同時に、シンプルな形態が反復やパターン化を超えて、唯一無二の絶妙な空間を生み出す瞬間を、冷静に見極める確固とした構成員を感じさせる。成熟と自覚に満ちた充実した個展であった。

根間智子による個展「Paradigm」(2/19~28)は、宮城島の自宅アトリエに作家自身が開設した「space」を舞台に開催された。フリーキリエイター・岡田晋寿氏が企画した。その中には同時に、濃密な厚みのある果てに開かれる種々の平面で、軽やかに「意識」を導く無垢なイメージへの希求があるように感じられるのである。(琉球大学准教授)

東京展(1/18~30、表参道画廊)に続く沖縄展としての開催である。会期に合わせて発行された岡田氏による作家論には、学生時代に伝統的な本画を学ぶことから始まった根間の制作が、その後、筆を用いたイラストレーションの絵画、写真、ガラスや樹脂による作品へと、さまざまな素材・技法を深く吸収しながら独自の表現体質を醸成してきた過程が詳しく跡づけられている。浸透、腐食、剥離、退色、沈殿、積層、結晶、屈折、感光…。自身が視ている対象との距離を、気に乗り越えるのではなく、こうした不透明な「物質の時間」に委ね、息をひそめて何ものから「出現」(岡田氏を待たず)、「貫して」粘り強い根間の姿勢が、今回の展覧会においては、わずかに変化しているように感じた。その兆しが、岡田氏を始め多くの評者がいうように、作者の「身ぶり」をきいた視線が顕在化したような「フレ」や「ボケ」の効果を生み出す、通常の知覚を超えた風景の「不分明」で「不確かな厚みをもった存在感」であることは確かである。だから、その際には同時に、濃密な厚みのある果てに開かれる種々の平面で、軽やかに「意識」を導く無垢なイメージへの希求があるように感じられるのである。(琉球大学准教授)